

# 青少年健全育成

信じ合い、認め合う 家族の絆・地域の絆

7月1日、名古屋文理大学文化フォーラムで青少年健全育成市民大会が開かれました。大会では、中学校・高校の生徒による発表のほか、青少年の間起こる問題に対して、家庭・学校・地域が一体となって解決に向けて取り組んでいく旨の大会宣言が採択されました。ここでは、自身の思いや体験をもとにした2人の生徒の発表を紹介いたします。

問合先 市役所生涯学習課 ■0587(32)1440

## 友人に気付かされること

杏和高等学校2年 鈴木梨恵琉

私には何かの折にふっと思いつく一人の友人がいます。互いの母親の仲が良かったことから、幼いころからたびたび一緒に遊んでいました。幼いころは何も考えずにただ友人として接していましたが、ある日、母親の言葉で彼女が障害者であることを知りました。その時初めて手の形が少し違っていたことに気付きました。

さまざまなリハビリに取り組みました。そして私たちが履く靴ではなく、装具を着けて彼女はとうとう走る事ができるようになりました。彼女は人一倍努力を重ねました。リハビリを兼ねて習字・ピアノ・バスケットボール・バトントフリングにも取り組んでいます。バトンの大会では何度挑戦しても「銀」という結果。そんな彼女を見て、彼女の母は現実を知ったほろろしいと「どんなに頑張っても金は無理だ」とアドバイスをしました。しかし彼女は五回目の挑戦をしました。残念ながら結果は銀。彼女を見るたびに、話を聞かされた私

心動かされました。努力しても叶わないことや手に入らないことがあると分かっていくのに、決して諦めることなくチャレンジし続ける姿に何度か励まされました。

そんな彼女に比べて私自身はどうでしょうか。友人として堂々と彼女の前に立つことができるでしょうか。いつもどこかで冷めてしまっている私があります。すぐに決める私がいま、諦めてしまっている私がいま。私にも負けず嫌いな人間です。しかし、いつも土壇場で失敗する前に逃げています。だから大きな挫折をしたこともなく、大きく傷ついたこともありません。自分は空っぽで弱い人間です。こんな自分を変えたいと思っています。しかし、実際は何も変わっていない今の自分があります。

## 人との繋がり

稲沢西中学校3年 野々部楓花

最近のニュースでは、悲しい事件が後を絶ちません。その中には、私と同世代の人たちが自ら命を絶つていく事件があります。その原因の一つとして挙げられるのが、いじめ。いじめなど自分とは無縁なものだと思っていました。が、実はいつ自分の周りで起きてもおかしくない、本当に怖いものだという話を聞きました。

私は部活動でソフトテニス部に所属しています。そこには、十年以上前から教えに来てくたさるコーチがいます。ある日、コーチからこのよう話を聞きました。「テニス部には、毎年試合に出られず悔しい思いをしている人が何人もいます。何年前か、その思いを嫉妬心へと変えた人がいた。その人は修学旅行中、持ってきてはいけないお菓子を

ギョラーの人に渡し「お菓子を持ってきている」と先生に言い付けた。ギョラーの人を罵にかけたということだ。こういっただことをする人は、もちろん選手失格。お前たちには、こんなことをしてほしくない」。私は衝撃を受けました。今の私たちとちよつと同じ時期、同じ状況。私たちにも起こり得るかもしれせん。小さな事のように思えますが、これも立派ないじめ。いじめが、とても身近なものに感じられて、ぞつとしました。

なぜこのようないじめは起きてしまうのでしょうか。私は、この先輩の気持ちになつて考えてみました。導き出した答えは孤独だったからではないか、です。先輩は、家族や先生・友達あるいは地域の人たちなどと、良い信頼関係

が結べていなかったのではないかと思っています。悩みがあつても誰にも相談できず、心の内にどめてしまつていた。人に本当の自分をさらけ出すことが出来ず、孤独に闘つていたのだと思います。それがついに自分の中ではじめてしまったのではないのでしょうか。自分ではない他の人がギョラーになつたことが許せなかつた。自分なりに頑張ってきたのに、その努力が認められなかった。信頼関係も薄かつたので理由も聞くことができなかった。ためていたこれらの思いが一気に流れ出て、いじめに至つたのではないかと思っています。孤独に耐え続けているのは、いじめられている側だけではなく、いじめめる側もそうなのではないかと初めて気が付きました。では、どうしたらいい